

二 地上決戦計畫

第一總軍司令官は第二總軍司令官が編成早々の一九四五年五月初旬先づ作戦計畫を決定し、總指揮下軍を指導し、爾後情勢の推移と兵備の進捗とを視み合はせつつ逐次之を補修して行つた統帥と異る方式を影つた。即ち取敢ず現在維持して居る作戦構想とそれに基く作戦準備とを總指揮下し其の簡作戦構想に根本的檢討を加へ七月中旬迄なる構想を確立し之に基く作戦計畫を決定し爾後之に據つて各方面軍司令官及各師團司令官を指導し作戦準備を促進した。

第一、第二總軍の統帥方式が此の様に異つたのは主として第一總軍擔任の東部日本正面の情勢は第二總軍擔任の西部日本正面が六月末以降陸軍米軍の來攻を豫察せねばならなかつた情勢に比へ時間的餘裕があるのと判断せられ又六月頃に至り米軍が先づ九州、四國方面に空海並進を確立した後東方面に向ふ算が愈々濃厚となつたことに因るものである。

此の頃米軍の東部地方來攻は一九四六年春頃と判断した。

第一總軍が七月中旬迄に確定した作戦構想が防衛總司令官や第十二方面軍司令官が從來抱持して居る構想と異る重要を認め次の點である。即ち従者が鹿島灘、九十九里、濱若くに相模灣方面より來攻する米軍に對し利根川上流及其の四方地區に決戦兵力を保持し米軍主力を判定したる上決戦正面を決定し筑波山一千葉の線以東若くは八王寺、百萬山系以南の地區に於て上陸米軍と勝敗を決せんとす準備態地の思惑で在つたが前者の思惑はあく主目的に決戦正面を九十九里ヶ濱正面と決定し決戦兵力を此の正面に推進配置し米上陸軍に橋頭堡を構成する理を異へざる様其の上陸米軍の動向に乘じて水際に三動攻勢を敢行するに在る若し九十九里ヶ濱正面の米軍が主力で無かつた場合に於ても先づ此の正面の決戦を完成し次で他正面米軍主力に對する決戦に移行せんとするものであつた又主決戦正面以外の正面に於ても果敢なる攻勢態法の敢行を要求した。

第一總軍司令部は此の作戰意の根本的更改に基く總指揮下各軍司令部の思想專導と作戰準備の修正には異常なる努力と強力な指導とを必要とした。又此の準備に云く冬正面と會戰の計畫は未だ確定を見るに至らずして終戦に至つた。

(1) 一般要領

(A) 蘇東地方を東部日本（錦州山系以東）に於ける最も重要なる決戦と決定し、蘇東地方に於ては最も重要なる決戦を九十九里ヶ濱正面に決定し、相模灣正面を之に次ぐ重要決戦正面と決定し、鹿島嶼正面は次等決戦正面とする。

(B) 海軍は海軍航空隊との協同要領に於ては第二節九州決戦の場合と同様であるが航空隊の主力は九州決戦の關係上期待し得ない場合を考慮し地上軍主力の決戦を覺悟する。

(C) 帝都特に宮城を中核とする帝都重要部を確保し宮城を警備すること及東京灣及相模灣口の突進阻止と九十九里ヶ濱並に相模灣正面に於ける決戦の支障たるの相見地から豊島半島、三浦半島の防衛と特に重視する。此の三浦半島の防衛及兩灣口の閉塞に關する海軍との協同を特に注意する。

(D) 地上兵力の配備及三決戦の一般要領は本節 (一) 項の冒頭に記述した後に九州方面に比し更に留意した水際警備戰三決戦の思想に導出した部隊上其の兵力配備は略々決定的配備を採り其の決戦準備は攻撃に徹したものを準備して居た。即ち九十九里ヶ濱方面を第一決戦正面と決定し決戦軍たる^{36A}の主力を當初より該正面千葉縣京北部地区に推進配備し其の一部を夫々相模灣、鹿島嶼正面^{35A}の後方に配置する米軍の上陸の期近迫しつつあることを豫察し得るに至れば此の決戦兵力を更に決定三攻勢正面（九十九里ヶ濱正面）（東京、八日市場間）相模灣正面（相模川

岸地區一に推進集中し展開する

米軍が上陸を開始せば九十九里濱正面に於ては米軍の主力たる

と一部たるを問はず此の正面に對し攻勢を斷行し其の決戦を

完成した後相模灣正面に對し此の正面に米軍來攻せず鹿島灘の

正面に來攻しある場合は此の正面に三決戦を轉移する豫想の通

米軍の主力が九十九里濱の正面に來攻しあることを確信し得る

に至れば51A 53Aの雙方に配属して居る一部の決戦兵力も九十九里

濱正面に投入する。鎌倉地方以外の方面から專用せらるる兵力

も此の決戦に投入する。さうより九十九里濱正面に米軍が來攻

せず相模灣及鹿島灘正面に米軍が來攻した場合は先づ相模灣、

次で鹿島灘正面に決戦を移す。

三決戦正面の會戦指導の領略の大綱を九十九里濱正面に就て例

説すれば當初より三決戦正面を東管十八日市橋正面に決定し52Aは

米軍上陸開始後二日目に先づ攻勢を断り其の紛戦状態に乗じ決

戦軍三万56Aが第三乃至第五日の間攻勢を断行する次で51A 52A三

方に配属しあつた36Aの一部を投入し決戦に東京地方以外の方面

より決戦集中する兵隊を三次に會戦に参加せしめんとする遂に

會戦加入の方式である。此の正面に於ても此の方式を準用する

意向であつた。此の會戦指導は米軍上陸未完の弱點に乗じ而も

絶望に瀕頭陸の攻撃に怒りをい胆に出づるものであるが戦力の

統一發達と状況の變化に即應する戦力ある會戦の指導を困難

にする不利を覺悟して居た。

第十二万は軍の第一編隊の作戦計畫に基き以上の腹案に據つて

會戦計畫を決定中終戦に至つたので之に基き各軍の作戦計畫と

會戦計畫は未だ確定せられて居なかつた。

三決戦正面以外の正面に於ても會戦の上陸米軍に對し上陸初動

の戦いに乘じ成可く多くの攻勢兵力を集中し攻勢を断行して米

軍の上陸を破潰すべき三決戦を強調した。

「註」一 第一總軍が(4)(5)の如く徹底した水際軍滅作戦に轉換した動機は純戰略的利害検討の外に一九四五年六月末頃作戦準備の重點を九州に移したる關係上關東方面兵團の裝備特に兵器資材の充足に對する確信が少くなつた點と沿岸住民の處理(之を放置して後方地區に於て決戦することの重大なる精神的感作)を顧慮した點にもある。

二 關東地方各正面の作戦計畫は(4)記述の如く未決定であつたので記載しない。

(2) 六月以降に於ける作戦準備の遲滯
關東方面決戦兵團たる 201D 202D 209D 214D は四月上旬動員を下令せられ、五月中旬第一總軍の綴下に編入されたが其の編成完結に六月旬に亘つた。次で七月末から八月月上旬に亘つて關東方面に 221D 234D 316D 354D の四箇師團(別に大島 321D 一と 114B₉ 115B₉ 116B₉ 117B₉ の四箇旅團が編成を 三八

終つた。又本章第四節に於て詳述する如く六月下旬東京防衛軍が新設せられ京都の防衛に任ずることとなつた。

兵備は以上の様に進歩しつつあつたが是等の兵團特に第三次兵備のものは九州方面と同様裝備が劣る外六月戦備の重點が西日本に指向された爲に關東方面の戦備の充實は機密に供され明年の春に非れば充足を期待出来ない項目に立ち至つた。秋季以降の生産と交通破壊を顧慮すると更に其の困難が顕著された。又(1)項冒頭既述の様に作戦構想の轉換に伴つて築城の改修、作戦意思及戦法の普及透徹、之に即應する交通、通信、兵站設備の修正盡く秋季以降の努力に期待せざるを得ない實情で在つて作戦準備の進歩は九州方面に比し更に遅滞した。特に後方に於ける軍需品の集積は遲滞した。

(三) 航空作戦計畫

關東方面の航空作戦は主として陸軍は第一航空軍、海軍は第三航空

艦隊が之を擔任することとなつて居た。但し本章第二節第四項既述の如く九州方面の決戦に當つては是等の航空兵力は其の後詰戦力として使用せらるる豫定であつたから關東決戦が九州決戦に次で起きる場合特に其の作戦間隔が短時間の場合には強力な航空作戦を遂行し得ない虞があつた。特に燃料の供給上作戦の遂行が不可能に陥る事さへ豫想された。

兩航空部隊の決戦時の作戦計畫の精意は九州方面のものと略々同要領であつた。

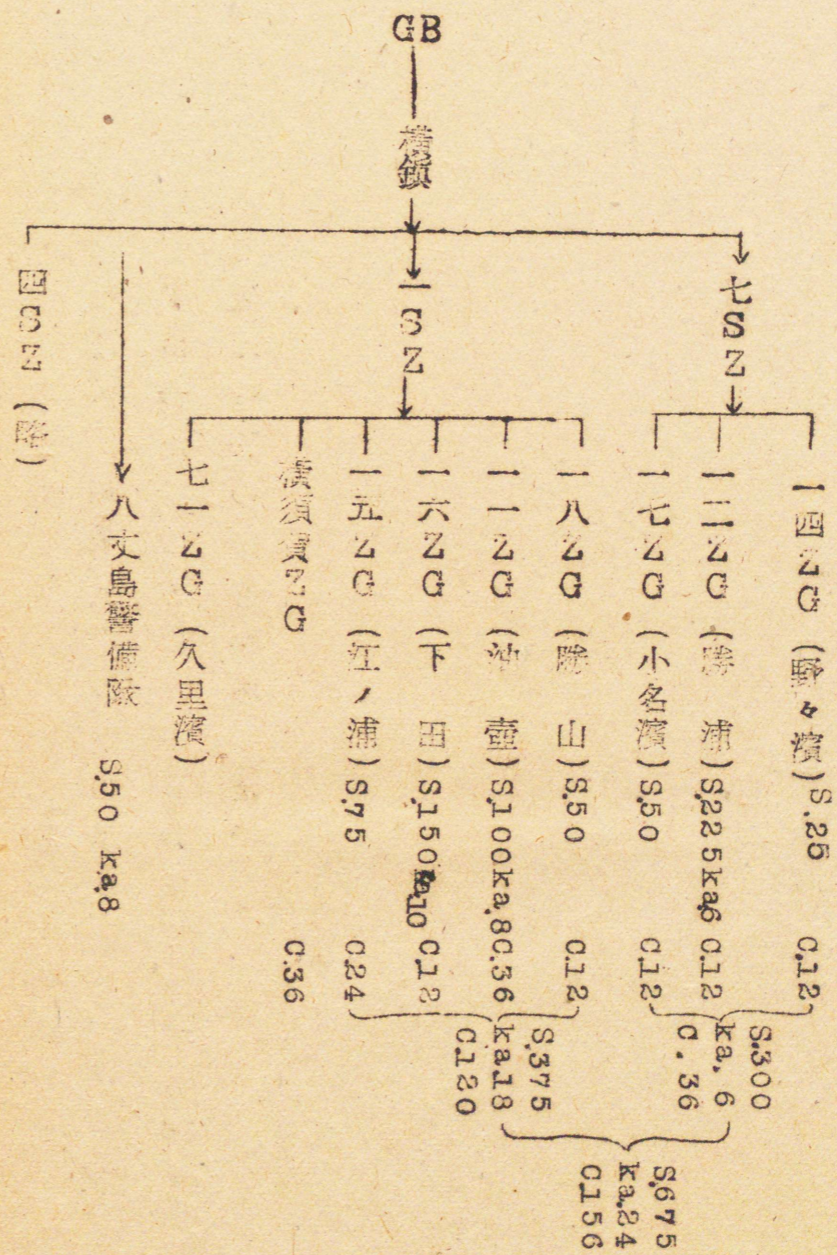
(A) 海上作戦計畫の骨子

關東方面に於ける海上作戦の計畫は九州方面と構想を一にして居たが九州方面の決戦に次で起る場合は特攻部隊の一部を除き全部を投入する計畫であつた。此の方面の作戦に於ては大なる奇襲を期待し得なかつた。又米軍が直落隊東方面に來攻する場合に於ても空水部隊の三方の外此の方面に使用する計畫を有して居なかつ

た。主として燃料の窮乏に因るものである。

關東方面作戦の編成置せられた海上特攻部隊の編制、配備兵力は次表の通りであつたが舟艇は九州優先の第十月以降生産決定のもの補給する方針であつた。従つて舟艇検査等を顧慮する時計畫通りの實踐を待てることに若干の懸念があつた。

關東方面決戰に應ずる上海特攻部隊の編制、配備、兵力



B) 關東決戦と九州決戦の關係に就て

米軍が關東と九州とに來攻するに就て、目的の差異と時機の考察に就ては本章第一節に於て又日本軍の此の兩地方に於ける作戰計畫に就ては第二節乃至第三節に於て夫々詳述した所であるが此の兩地方の作戰計畫の相互關係に就て次の幾を微妙な問題があつた。眞の一つは一九四五年七月頃米軍の來攻方面が西に日本特に九州、四國方面と決定し一時關東方面の作戰準備を犠牲とし陸、海空の作戰準備の重點を西に日本に集中した。此の結果關東地方の作戰準備特に兵備は一九四六年初頭に非れば充足し得ない實情に在つた。若し米軍が日本軍の兵備を裏切り一九四五年秋冬の侯直攻關東地方に來攻することかあれば國家の最後の存命を決する關東決戦の進行上重大な支障が生じたであらう。

眞の二つは九州決戦に成功し得たならば關東地方の決戦は生起しなかつた或は遅くも其の時機は遅くも遅延し而も此の簡潔な比較

的有利に終末し得る政治的施策の好機が捕捉し得るかも知れない
 との観測に基き先づ九州決戦準備に重點を傾注し決戦に際しては
 海軍の全航空戦力を是に投入し地上戦力も軍備団を轉用する
 決意を固めた。然し乍ら問題が九州決戦の完遂を期し得るか否か
 と云ふことと或程度に成功を収めた場合其の結果に對する期待
 が觀測通りであるかどうかと云ふことと更に若し九州決戦が完全
 なる勝敗の終末に至らず膠着し日本軍が戦力を之に逐次注入しつ
 つある時米軍が相續いで討東決戦を急ぐ決意を採る場合等に在つ
 た不幸にして米軍の討東決戦力數ヶ月後に生起することがあれば
 既に全航空戦力（燃料を含む）を消耗し僅かに數ヶ月の間の洞窟
 生産に依る航空戦力に依存し而も敵軍編團の地上兵力を缺いて陸
 東地方の決戦を遂行せなければならぬ苦みがあつた。第一海軍
 は此の事を豫期し海軍の戦力を缺いた場合にも對應する如く其
 の作戦を計畫準備して居たが在戦當時は現實の問題として其の

作戦の遂行の困難性を具加すべきことを考慮して居た。

第四節

東京防衛軍の編成

日本

日本の政戦兩略上の中樞地區であり假令其の機能喪失した場合に於ても内外に及ぼす精神的價值や關東作戰の戰略的價值を考察する時東京地區の確保が極めて重要なる命題であることが意識された、大本營は此の地區を防禦に専心する一軍を新設して其の確保に當らしめ第一總軍司令官及び第十二方面軍司令官が此の地區の防禦に注意や努力を奉はるることなく關東決戦を果敢に遂行出來而も沿岸決戦が不成功に終つた場合東京地區を支撐として第二次の會戦を遂行する考慮に基いて六月下旬東京防衛軍を新設した此の軍は第十二方面軍司令官の部下に置かれた、其の司令官には陸軍中將飯村穰が任命せられた。

大本營が第一總軍司令官に對し此の東京防禦につき與へた任務は一年の持久を目途し官城を中核とする帝都の根拠部を確保し官城を

奉護することであつた、此の任務を遂行する爲に關東決戦後遺に於て野戦師團二乃至三師を基幹とするもの、飯村中將の部下に入らしめることが予定された、其の命令は次の内容であつた

大本營命令要旨

第一總軍司令官は帝都區域の作戰に關し左記要綱に準據し作戰準備を實施するものとす

A 官城を中核とする帝都根拠部を確保して官城を奉護し帝都を維持す

B 決三號作戰（關東決戦）遂行に伴ひ左の兵力を東京防衛軍の戰鬥序列に入らしむ

野戦師團 二乃至三師（決戦に當り第一總軍總下外より集中する兵團を予定す）

高射第一師團（一ヶ聯隊を特）

東京防衛計畫要圖



備考

- 前進陣地
- 主陣地
- ◎ 特要陣地

所要の軍直部隊（決戦に當り第一總軍無下外より集中する獨立

戰車旅團一個、野戰重砲兵聯隊用二營獨立野

砲兵聯隊及獨立聯隊及獨立山砲兵聯隊一營）

○主力を以て宮城奉護を主眼とし宮城を中核とする帝都の樞要部を確保す

之が爲一部を以て其の外方所要地域の要域に於て敵戦力の消耗を策す

□前項要域以外の帝都に於ける諸施設及港灣施設は作戦上利用するものを除き米軍の便寇に先ち即時撤収又は破壊して帝都防備の用に供し又は之をして敵に利用せしめざるものとす

■帝都周邊地區の國民義勇戰團等は作戦初期東京防衛軍司令官の指揮下に於て帝都防衛作戦に参加せしむ

●作戦準備は作戦目的達成上必要なる規模と強度とを併有する築城等に地下構築を主眼とす

●作戦は一ケ年の持久を目途とし作戦資材の大部分は他方面よりの專用資材を期待するものとし之が地下格納施設を整備するものとす

●築城守備に差支なき限り近衛第一師團を作戦準備に使用することを得

(B) 東京防衛の計畫（要圖参照）

東京防衛軍司令官は東及北正面は隅田川及上野に亘る線、西及南正面は山の手線を前線とし宮城を核心とする地域を復原障地とし外周は東京都三五區に屬する地域を外廓障地帯として防禦地帯を構成し地下築城を實施して鞏強なる市街戦に依つて任務を遂行する計畫を立てた其の内容は當時の東京防衛軍參謀長の記憶に依ると次の通りであつた。

一 東京防衛軍の作戦計畫の骨子

第一 方針

(A) 一偏重の持久を目途とし官城を中核とする帝都の樞要部を確保し官城を率護す

防衛の重點は正面とす

第二 築城要領

(B) 官城を中核とし淺草附近を経て品川附近に至る畿ね山手線に沿ふ地域及品川、隅田川、河口間の海岸附近を主抵抗地域の前線とし主として戦車部隊及空襲に抗堪し得る如く三ヶ師團分の堅固なる築城を畿深及地下に築造し特に獨立性保持に注意す。

右築城に着手の時期は昭和二十年八月中旬頃とし同十二月末迄に完成し二十一年三月末迄に補強す。

(C) 官城周邊の堤町、福田附近の地域を後廊とし主陣地帯の完成後之が築造に着手す。

(D) 飛鳥山、扇塚、品川宿附近に應るべく速かに堅固なる前線陣地を構築す。

(E) 二十五年十月頃より金町附近より下流の江戸川右岸の練栗原村、川口市及赤羽、箱谷戸、天沼、下喜井戸、大塚、池袋、豊島、田圃調布、下池上、大塚前、羽田町及多摩川、江戸川河口間の海岸線附近の要地に警戒陣地を構築し又一ツリラー的計畫の要を行ふ。

第三 作戦指揮要領

(F) 警戒陣地は第二線兵團より一連の兵力を配置する外同陣地より主抵抗地域に赴る間に於ては「ゲリラ」的作戦を指導す。

(G) 主抵抗地域に於ける配置は概ね兵力の三分の二とし其の重點を正面に置き地下施設及斜交陣地設備に依り靱強なる抵抗を爲し縱令其の一部を突破せられたる場合に於ても逆襲に依り陣地回復に努む(四)状況偵察に己を得ざるに至れば後廊陣地に後退し之を死守す。

官城

軍司令部は現在の近衛第一師司令部附近を決定した
 第一師司令部官及第十二方面軍司令部は沿岸津島が不成功に陥した
 場合或は津島中他正面に上陸した米軍が其の正面の我が沿岸砲備兵
 隊を空襲して東京都市を脅かす様な場合東京防衛軍が以上の計畫に
 基いて奮勇確保しつゝある帝都を支障として他方面の防衛軍を或地
 區に集結し帝都を力攻しつゝある米軍に對し第二次の會戰を遂行せ
 んとする着想を抱いて居たが其の構想は具體化して居なかつた。
 選ばれた此の東京防禦の複層陣地は砲台中將が昭和の初年に東京要
 塞の防禦線として研究せられた考案に示唆を得たものである。
 以上の構想、計畫に基いて東京防禦の築城は八月二十日から開始す
 る豫定であつた。近衛師團は之より半に主として官城の築城を擔任
 し之を繼續して居た。然し乍ら半歳後に決戦を豫期する當時の情勢
 下に於て僅かに表裏の優秀でない三師の準備陣地を以て而も築城材
 料や器材の缺乏に悩みつゝ甚大なる此の東京要塞がどの程度に出來

るか當初より非常な熱念が持たれた。殊に築城の急務に迫られて訓
 練の暇の無い是等の部隊が勝に誇り東京都に突入する米軍の空襲機
 隊の集中攻撃に對抗して果して完全に任務を遂行し得るか否やに就
 て軍當局者には非常な苦慮があつた。軍司令部以下此の任務遂行の
 困難を自覺しつゝも皇居と帝都を守護する任務の絶大なる光榮に感
 奮し日本軍の傳統の熱を發揮すべき固き決意に燃え在戦準備に當り
 つゝあつた。

(1) 帝都の問題

此の帝都の防衛と關聯して微妙なる問題は大本營の一師の作戦當時
 孝に於て関東津島甘地本土防衛の非常事態に備へて極めて秘密裡に
 長野縣に臨時の大本營が施設せられつゝあつたことである。
 此の工事には長野縣松代に一九四四年春着手された全施設強力なる機
 關に堪え得る様に「ベトン」を以て固めた坑道施設で一九四五年七
 月頃には既に完成して居つた。斯る施設は行はれて居たが終戦直前

に於ても大本營營事者は本土決戦に東洋戦に當つて大本營が最
終迄東京に位置すべきか又け最後迄東京及全國民の持節を統帥する
爲の位階に如何すべきかを決して戸方かつた國民及軍官に及ぼす
精神的感作を重視する場合東京に位置するを必要とし軍官及國民
の身後の一人迄擁護せしむる焦土抗戰の作戦目的地を重視する場合
は轉位を必要とした大本營は其の如何にも應ぜらるゝ増宮城及現在
の大本營の施設をも増強しつゝあつたが六月八日の御前會議に於て
海軍の問題が論議せられ鈴木總理大臣の主張なる主張に依り國民指
導の見地から遷都せざる意見に一致した。

尙東京に位置して東洋戦の準備を推進しつゝあつた第一總司令部
部及第十二方面司令部も一九四五年九月頃より其の指揮中樞を總
司令部の喜崎西側高地に、方面司令部は松山附近に移轉するに
準し準備を急いで居つた。然し乍ら本章第三節第二項記述の様に水
陸軍統帥の主義に徹底するに至つたので是等の司令部は海軍正副の

部兵團に對する系列なる陣地指揮の必要に基き海軍正副の司令部
を推進する必要に就き改めて検討して居た。